

姫路港と小豆島(福田港)を結ぶ ― 小豆島フェリー株式会社 ― ▲▽人と自動車はフェリーが便利▲▽

瀬戸内国際芸術祭 夏会期・秋会期に向けて

古来より日本列島の大動脈として海上交通網が発達してきた瀬戸内海。3年ぶりに開催された瀬戸内国際芸術祭2022は春会期を終えたが、夏会期が8月5日から始まる。また、秋会期が9月29日から始まるので、これから準備して、島めぐりと芸術祭の両方を楽しむ計画を練ることができる。

小豆島をはじめ豊島、直島、犬島、男木島、女木島、大島、沙弥島、高見島、伊吹島、本島、栗島の12の島と高松港と宇野港の2つの港が舞台となる瀬戸内国際芸術祭。人も自動車も、最初に姫路港から小豆島にフェリーで移動するのが便利。また姫路では、世界遺産・国宝である姫路城（別名＝白鷺城）も訪ねたい

▽小豆島フェリー株式会社 姫路～小豆島航路

姫路港旅客船ターミナル（飾磨埠頭^{しかま}）から小豆島の福田港までの航路で、第三おりいぶ丸と第五おりいぶ丸の2隻で7往復している。多客期は増便もあり、国道436号の海上区間を成している。

旅客船ターミナルは、1988年にオープンし、この飾磨港区飾磨埠頭は水深10～12mのバースを備えており、大型外航クルーズ客船の接岸にも対応している。

姫路港旅客船ターミナルの前にポートセンタービルがあり、1階がチケット売り場で、2階の「姫路みなとミュージアム」は無料で見学できる。

▽第1回芸術祭のテーマ＝海の復権

2010年に瀬戸内海の島々で第1回目の芸術祭を開催することが正式に決定されてから瀬戸内国際芸術祭は今年で5回目を迎えた。

舞台は瀬戸内海、そしてそこに浮かぶ島々。海は太古から多くの人たちが移動する自由な交通路であり、海に囲まれた日本は海を介してさまざまな地域、国々とつながってきた。そして島は、旅人にとって安心できる止まり木的な存在。

瀬戸内海は、日本列島にとっていわばお母さんの子袋のようなもので、静かな落ち着いた海でありながら、豊かな養分やエネルギーにあふれている。歴史的にも瀬戸内海を中心に、地域と地域の交易や文化が発展し、海と島を中心に日本の中核を成したが、近代になってすべてが陸地において発展していくようになると、海と島の大切さが忘れられるようになった。特に周りが海という閉鎖性、その管理のしやすさだけが注目され、監視する場所、あるいは周囲から隔離し情報をシャットアウトする場所として利用され、犬島の精錬所、豊島の産業廃棄物不法投棄、大島のハンセン病患者隔離などといった歴史がある。そのような状況で過疎高齢化が進み、島の活力が失われ、地域力が減退していく。すると人々は、海を豊かな価値の源泉とは考えなくなり、それまでに培われたさまざまな財産が失われて、陸地でより多くの価値を生み出すために海が忘れ去られた。

そのような背景があるこの瀬戸内海で芸術祭を行うならば、第一に考えなければならないのが本来の海のあり方であり、それは同時に島の人々の生活や歴史、そして心のあり方につながる。第1回瀬戸内国際芸術祭の開催にあたって、そのテーマを「海の復権」とした。これは島の過疎高齢化という現実

対して、そこに住んでいるお年寄りにもっと元気になってもらいたいという願いを込めたテーマ。島を守ってきた先祖への感謝、島で生きてきたことの誇りを再び持つことに伴走したい、誇りを基盤にしてもう一度島の展望をつくりたい。そのための切り口がアートや建築であり、芸術祭を継続し地域の問題と向き合った。

さらに「海の復権」には、現在の都市のあり方への疑問や地球環境問題への取り組みの意味もあり、海をもう一度考え直し、人間が何かを決めて自然の物事を動かせるという思い上がりをいましめ、地球環境が危機に陥っていることに警鐘を鳴らしている。

「海員だより」